

潮騒通信「どっこい生きてます！」

回復プログラムに乗れない仲間とどう向き合うか

庭には花が咲き、木々は若葉の緑にあふれ、鳥がさえずり、早苗の田んぼはカエルの大合唱です。生命の息吹と躍動感がみなぎり、生きることの素晴らしさを教えてくれます。掛け値なしの自然の恩恵ですが、アルコールや薬物、ギャンブル依存症の厄介な病気を抱える者たちにとっては、季節の変わり目は要注意です。原因はよく分かりませんが、春先から初夏にかけては入寮者の抑うつ的な傾向が強まります。この時期をどうしたら“無傷”で乗り切れるか、頭の痛いところです。加えて、最近の潮騒には「来る者は拒まず」の運営原則から、どうしても行き場のないボーダー（境界）型の依存症者？ が集まります。その多くが重い精神症状を併発した人たちで、彼らが施設の“主役”となってからはちょっとしたことからトラブルになるケースが多くなり、無気力や徒労感が蔓延しがちです。「回復したい」「社会復帰したい」という意欲に乏しく、施設内にただ滞留している感じなのです。これまでのやり方では対応できない困難に直面しています。

過去を振り返ると、私の場合はステップ1で無力を認め、依存症者として生きることの自覚を深めて以降、同じ病気の仲間と共に歩む人生を選択しました。自分がリハビリ施設で助けられたことから、「一人でも多く苦しむ仲間を助けたい。そのことが自分の回復につながる」と、非力を承知で施設を運営しています。私の回復体験から「曖昧さ」「いい加減さ」を認め合い、規則に頼らずに自主性や自立性を促すことが重要だと自分自身に言い聞かせてきましたが、依存症よりも別な精神疾患（主に発達障害？）が重くのしかかっている、新たな課題を抱える入寮者たちの急増で、この運営原則が危うくなっています。彼らの多くが、施設が提供する回復プログラムに乗れないだけでなく、施設運営を停滞・混乱させているからです。病気が深いというより、長年の「怠惰」な生活スタイルの悪習から、私が信条とする「曖昧さ」「いい加減さ」を逆手にとって、「怠惰」を自らの病気の正当化に利用しているフシがあります。「楽に生きたい」という心情は誰しも心のどこかに潜んでいます。でも、そのことに甘えて「怠惰」な人生を正当化してしまうと、私たちの回復の歩みはストップしてしまいます。例え後ろ向きでも前に進むには、自分の弱さやダメさ加減に素直に向き合い、謙虚に生きることが大切です。

今、私の目に前に突きつけられているのは、生きることの意欲が極端に低下した人たちの重い現実です。世間から「怠け者」「人生の落ちこぼれ」のレッテルを張られた彼らに、どうしたら人間としての尊厳を取り戻し、生きる希望を引き出せるのか、どうしたら潮騒JTCが彼らに癒しと救い、希望を与えられるのか—私の苦悩は日々、深くなるばかりです。

（施設長 栗原 豊）

SJTC

SHIOSAI JOB TRAINING CENTER

2012年

5月号 一部 100円

Contents

- P1 新たな困難に直面して
- P2 太子南中で薬乱講演
- P3 フォト特集・薬乱講演
- P4 荒れ地を畑に開墾
- P5 潮騒田植えプロジェクト
- P6 増古四郎さんに聞く
- P7 近藤インタビュー連載1
- P8 回復物語&誕生日
- P9 全国受刑者からの便り
- P10 しろさい文芸コーナー
- P11 しろさい文芸コーナー
- P12 行事予定&献金献品



潮騒メンバーが中学校で講演しました（2、3頁に記事）

ニ誘惑にNO! ~正しい知識と断る勇気を~

大子南中「薬物乱用防止教室」で栗原施設長らが講演

県北の大子町立南中学校（山崎則子校長）で 5 月 15 日、平成 24 年度薬物乱用防止教室があり、要請を受けて潮騒ジョブトレーニングセンターの栗原豊施設長と入寮者 2 人が講師を務めました。栗原施設長らは薬物やアルコール、ギャブルなどに依存した挙げ句に、生きることも死ぬこともどうにもならなくなった過去の「どん底」体験をきたんなく話し、生徒たちに衝撃を与えました。

同中では毎年、この時期に薬物乱用防止教育の一環として講演に取り組んでおり、これまで警察関係者やダルクメンバーらを講師に迎えています。今回は潮騒 J T C が昨年 3 月に発行した県人権啓発活動等委託事業による入寮者らの回復証言冊子「この熱い魂を伝えたいんだ!」を読んだ学校側からの依頼で、潮騒メンバーによる講演が実現しました。潮騒では裁判所での情状証人や病院、刑務所でのメッセージ活動は盛んですが、学校現場で若い生徒たちに向けたメッセージ活動は少なく、貴重な体験となりました。

自然豊かな山間部にある同中は全校生徒約 60 人の小規模校ですが、純朴で素直な生徒たちは先生と濃密な関係を築き、家庭や地域と連携して活発に学習や部活動に取り組んでいます。直接、薬物問題が身に迫る状況にはないもののゲームや携帯電話などへの依存傾向が見られることから、今回は「やめられないゲーム、それでもあなたは続けますか」をテーマとして、それらが高じて「依存症」に陥るとどんなに抜け出すのが大変かを潮騒メンバーが直接体験を通して生々しく語り掛け、生徒たちが熱心に聞き入りました。

栗原施設長は依存症が現代社会の病理の側面を持ち、薬物・アルコール・ギャブル依存症だけでなく、摂食障害や自傷行為、買い物、ゲーム、携帯電話、パソコン、恋愛など多岐にわたる分野でも陥る危険性があること。依存症は自分ではなかなか病気と認められない「否認の病」であり、心の中に巣くう「寂しさの病」、さらには人やモノ、対人と適切な距離を保てないコントロール障害、「関係の病」であることなど、特徴的な側面を説明しました。中学生を対象とした講演体験が少ないことから緊張した様子でしたが、「ドラッグから身を守る潮騒 J T C からのアドバイス」として、心から打ち解け合える友人をつくり、大切に友情をはぐくむことや学習、スポーツに打ち込むこと、家庭での一家団欒や親との会話、メリハリのある家庭・学校生活を送ること、何よりも自分を大切にできる正しい自尊感情を育てることが「依存症の悪魔から君たち中学生の身を守ることにつながる」と力説しました。

(イチ)



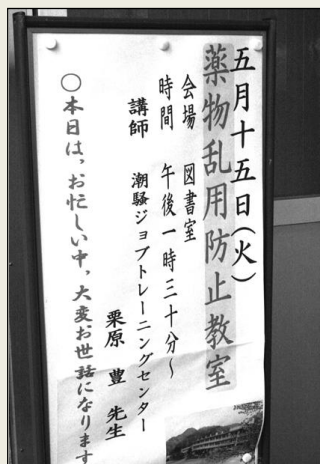
フォト特集～「太子南中薬物乱用防止教室」から



※学校現場での講演は不慣れな潮騒メンバーですが、生徒たちはよく話を聞いてくれて、質問もありました。最後にお礼の言葉や花束をいただきました。山崎校長も「狙い通りの話が聞けてよかったです。生徒たちの心にも深く響いたと思います」と評価してくれました。依存症者は何よりも自分に正直になり、人前でどんどん恥をかくことが回復につながります。要請があればできる限りお受け致しますので、どうかお気軽に潮騒までご連絡ください。



※今回は、潮騒入寮者の中では比較的、中学生に近い？ 若い世代の加勢誠さん、小島誠さんが講師を務めました。緊張を感じさせないスピーチで、「私たちを反面教師に薬物から身を守って」とアドバイスしました。



荒れ地を開墾しサツマイモ畑に

◆耕地整地されない畑地が荒れ放題に

潮騒 JTC の入寮者たちが、鹿嶋市大字猿田字北ノ内の荒れ地 1992 平方メートルを開墾し、畑地にする作業に取り組みました。地目はあくまで農地(畑地)ですが、耕地整理されていないために機械が入れるような農道が整備されていなかったのに加え、これといった換金作物も地域に普及せず、産業構造が 1 次、2 次から 3 次、4 次産業へと変化して地域農業が衰退する流れの中で、この辺り一帯の農地もだいぶ前から人の手が入らずに荒れ地と化していました。今回、延べ 10 日近くにも及んだ作業は、期間中に雨にたたられた日もありましたが、潮騒ファイザープロジェクトが農業を中核として方向づけする重要な取り組みとなりました。

入寮者たちは荒れ地に生えていた木や草などを伐採し、下草を草刈り機で刈ったあと、ショベルカー(ユンボ) 2 台で地面を掘り起こし、掘り起こした地面から木や竹の根っこなどを取り除く「天地返し」と呼ばれる作業に従事。徐々に土地を開墾していきました。土地の周囲には切り倒された木や草などで囲いが作られ、隣接する荒れ地との境界を示す目印にもなりました。整地された面積の広さを目の当たりにして、改めて現代農業は機械化が不可避なものであることを思い知りました。現場では、大型特殊免許を持っている入寮者が重機を操作したほか、重機操作のベテラン入寮者が若手の仲間たちに重機操作を実地で教えるなど、将来に向けた職業訓練が行われていました。

◆「長い時間乗っていればうまくなる」

若手入寮者のケン坊さんに重機操作を指導したカマタさんは「(ユンボは) 乗らないと覚ええないが、一回(操作方法を) 覚えると忘れない。車の運転と一緒に」と話し、現場で重機操作を体験して「体で覚える」ことの大切さを力説しました。初めてユンボに乗ったケ

ン坊さんは「現場でやったことがないし、慣れていないから難しい」と最初は戸惑いながらも、カマタさんの指導に沿って着実に重機操作をマスターし、地面の土砂をかき出していきました。カマタさんは、ケン坊さんについて「大丈夫。後は長い時間乗っていればうまくなる。要は慣れですよ、慣れ」と語っていました。



入寮者たちは施設内に閉じこもっている生活よりも野外で体を動かす作業に魅力を感じており、ケンボウさんは「外に出たほうがいい。中でしゃべっているとあきちゃうし、人間関係などでストレスがたまり、気が滅入っちゃう」。カマタさんも「俺は表に出て体を動か

したほうがいい。食事もうまいし、夜はぐっすり寝られる。(睡眠導入剤を) 使わなくても寝られる」と話していました。

農地の所有者で今回のプロジェクト提案者の増古四郎さん(NPO法人理事)は、開墾作業に従事した入寮者について「みんな非常に真面目で一生懸命にやっている」と評価。開墾した畑地については「ゆくゆくはサツマイモやジャガイモ、ダイコンを植えていくことを構想している」と述べ、付加価値の高い農業を目指したいと意欲を見せていました。

(サッキー)



フォト特集・潮騒田植えプロジェクト



潮騒JTCが施設を挙げて取り組むファイザープログラム事業で、職業訓練の柱となる農業分野の取り組みが本格化しています。5月上旬には支援者の協力を得て「潮騒・田植えプロジェクト」に取り組みました。今回はその様子を写真で振り返りました。みんな生き生きとした表情です。



「重機が覚えられ、畑仕事もでき、人とのつながりも、」

潮騒発展のチャンスを生かして！～支援者・増古四郎さんが熱い思いを語る



今回の開墾プロジェクト提案者の増古四郎さん

潮騒ジョブトレーニングセンターの支援者の一人、増古四郎さん（マスコ測量会長）が、鹿嶋市猿田地区の荒れ地開墾や潮騒 JTC に対する熱い思いを語ってくれました。増古さんは事業家として成功するまで大変な苦労をされた経験から、地域社会を構成する人たちが互いの傷みを本音で分かち合うことの重要性や、一見遠回りに見えても社会的な弱者とされる人たちとの共生が、人間関係が疎遠になった地域コミュニティを豊かにするという意見をお持ちです。早い段階から潮騒の活動に理解を示し、熱い支援をされています。増古さんは今回の荒れ地開墾プロジェクトについて「重機の操作や作業の流れが覚えられる。畑仕事もできる。人とのつながりが良くなる」などのメリットを挙げ、以下のように説明しました。



「開墾を進めた 581 坪（面積 1922 平方メートル）の荒れ地だが、元々は桑畑だった。しかし、区画整理されていない畑地だったために、農業機械を入れるのが困難だったことから使い勝手が悪く、周囲もそうだが 20 年近く耕作放棄していた。開墾作業をする前は雑木や雑草、シノなどが生い茂り、地中深くまでくずイモが根を張った。荒れ放題の原野だったが、重機を使った開墾作業はさすがに効率が良く、4 月初旬から進めて中旬までにはあらかた片付いた。農業経験のない入寮者が関わる事を考え、全部だと手に負えない広さだと考え、当初は 300 坪程度を畑として確保したい。夏場の除草作業など手の抜けない管理が一苦労だろう。開

墾した畑地については、トラクターを入れて耕運し、堆肥を入れて再度耕運したあと、ビニールを掛けて 6 月にはサツマイモを植える段取り。10 月には収穫する見通しを立てたい。敷地内に 4～5 間ほどの貯蔵ハウスも建設したい。サツマイモはこの地方の特産でもあり、例えば潮騒が自力で焼きイモ販売を手掛ければ付加価値も高まる。軌道に乗れば、秋ダイコンを作るのはどうか。ダイコンをたくあん漬けにして潮騒独自のブランドとして売り出すなど夢がどんどん膨らむ。いずれも単年度でやるのではなく、数年のスパンで考えたい。あくまで事業の主役は依存症という病気を持つ入寮者だということを忘れないようにしたい」



潮騒 JTC にとって農業を中核とした作業療法は回復プログラムとしても有効で、入寮者たちの取り組みをつぶさに目にしてきた増古さんは、彼らの成長ぶりを「作業に何ら遜色はない」と評価しました。作業を通じてチェーンソーが使える、手入れもできるようになったほか、集団での作業を通じて「絆ができています。（技術取得の）効果はあった」と語りました。ただ、スリップする入所者が少なからず出る現状では「思うようにはいかないかもしれないが、ある程度の規約を設けて社会復帰をさせる準備をする」「ジョブトレーニング専用の圃場を作る」を提案しました。

将来的には潮騒施設内で職業訓練の指導をするリーダー育成の必要性についても力説し、「リーダーになる人が何人作れるかが課題だが、今の段階でも（入寮者を）引っ張っていけそうな人材が何人かいる」と明るい見通しを示しました。このほか本プロジェクトの主眼である、社会復帰をにらんだジョブトレーニングとその受け皿となる就労支援ネットワークづくり、依存症者に対する地域環境整備については、「ファイザー助成金を有効活用して基礎固めと方向づけの事業として位置づけてほしい」「あれもこれもという欲張った性急な取り組みではなく、地に足をつけて今の潮騒の陣容や水準に沿う事業内容にしていけることが大事」と提言してくれました。

（聞き手・S）

近藤恒夫・連続インタビュー～「薬物依存と回復の権利」VOL1

「俺たちから人権を言っちゃだめ。大成功を収めたと言う人もダルクにはいるけど、それはおかしい」

—Q 近藤さんは1995年に東京弁護士会人権賞を受賞していますね。あれはどういう経緯だったんですか？

近藤 亡くなったけど、ぼくの活動に理解をしてくれた、知り合いの堀川文孝弁護士が推薦してくれたんだ。国会図書館に連れていってくれたりしてフットワークのいい弁護士で、少しアルコールに問題があって最終的に彼は自殺しちゃったけど。その堀川先生が「近藤さんの活動すごいから、推薦しておきますよ」と。その時に僕の恩人でもある元判事で後に弁護士となった奥田保先生もいたから意外にすんなり通ったんじゃないかな。

—Q 日本では薬物依存者といえば、まず犯罪者という色メガネで見られます。「ヤク中」の表現が示すように、犯罪や非行という視点が強いので人権の面でも制限されて見られちゃいますよね。それだけに近藤さんが、当事者として人権回復の先駆的な第一人者ということで評価されたと思うんですけど。改めて、薬物依存と人権について伺います。どうしても日本では声高に、当事者から人権を叫びにくい状況がありますよね？

近藤 いや、人権回復なんておこがましい。俺たちから人権を言っちゃおかしいと思う。我々が人権とか、我々が正しいとかを言うべきではない。国家に、我々が「金がないから金をください」というのもおこがましい。だから、誰か代弁してくれる人が必要になってくる。

それがアパリであったり、取り巻いている当事者で

はない人たち、弁護士であったり、精神科医であったり、そういう人たち、支援者たちが、ぼくらが継続してやってきたことに対して多少信用がついて（27年間もやったわけだけれど…）、認めてやってほしいと関係機関に働き掛けたり、助言するのはありだけど、当事者が言うべきではない。

—Q そのところをもう少し説明してください。

近藤 我々が正しいということは言うべきではないが、我々が良くなることの権利はある。そして同時に、人は悪くなっていく権利もある。そういう微妙な位置にいる我々と、権利の向上を目指す人や権利擁護を声高に主張する人たちとを一緒にしてしまってはまずい。

薬物依存の世界で我々が少しでもよくなって、次の人たちを手助けする役割を守っていければ、少しでも再犯が防いでいけるということだから、それは合理的な話。ただ社会は一度なってしまった人たちが再犯が多いせいもあり、なかなか信用してくれない。

良くなったらということ

が、次の世代の子どもたちにそのことを伝える時に、「薬物をやってもよくなるよ」という話になっちゃ困る。それは難しいところ。なって悲惨な体験をしたけど、今はこうして立ち直った、と。

で、これが「大成功を修めた」という話になるとダメだからな。大成功したと自負している人たち、いっぱいいるじゃん。ダルクの中にも。でもそのことを言っちゃだめなんだよ。そのところのケジメというか、常に謙虚でなければならないというのが、私の回復の権利の考え方です。

(次号に続く)



★我が回復物語～エンさん&ジョーさんの巻★

◆今日一日シラフを積み重ねることの幸せ

薬物依存症のエンです。自分自身の回復ストーリーについて語ろうと思うのですが、私は自分が回復していると胸を張って言えません。なぜかと言うと、2、3カ月くらいクリーン期間が続くとスリップしてしまうからです。スリップすると、それまでに自分が回復を信じてやってきた事が何だったのか、とても絶望感に襲われます。だけど、死ぬ勇気もない私は日々、施設にいて同じように回復を目指す仲間の中でプログラムをやっていくしかありません。時間が経てばまた回復を信じられるようになり、微かな希望の光を見て過ごしています。立ち直るのはいいのですが、心の傷が癒えてくる頃になると、毎日少しずつ魔が入り込んできます。

夜寝る前などに依存薬物の事を考える時間が、日に日に増えてくるのです。もう、うんざりなはずの薬物が、またもや自分の頭から離れなくなります。そうすると結局、私は薬物が好きなんだと、やりたいんだと、認めるしかありません。「もう参りました。疲れました。神様どうか助けて下さい」。自分の無力を認めて、自分を超越る偉大な力を信じて毎日を過ごすようになると、不思議なことにシラフでの生活が結構楽しく、小さな幸せを感じたりすることに驚かされます。

ミーティングで「自分の毒」を吐いているからなのか、後ろめたい事が何もないので、素直に楽しめます。そんな新しい生き方を続けて行くために、せっかちに

ならず、一步一步、今自分に出来る事をやっていけばいいんだな、と思い直しています。そんなに遠くを見ないで、今日一日シラフを楽しみたいと思います。ありがとうございました。(エン)

◆マリファナと音楽と犯罪と私

アディクトのジョーです。僕がクスリに手を染めたのは二十歳ぐらいの時からで、最初はマリファナでした。それまで酒もタバコもやらなかった僕は、この違法薬物の虜(とりこ)になりました。酒やタバコは違法ではないので興味がありませんでした。今考えれば、僕には犯罪者の素質があったのだと思います。少年の頃の僕はミュージックに熱中していましたが、アメリカの有名なロックアーティストが麻薬で死んだと聞いて興奮しました。大人の目からみれば、「ケシカラシ！」と思うでしょうが、そういう事が伝説のようになってしまう事が、僕の少年の頃には少なくなかったと思います。

そんなわけでマリファナを吸い、サングラスをかけて不良ミュージシャンを気取っていました。ミュージシャンは十八才頃から職業としてやっていましたが、いつも麻薬の事は頭から離れませんでした。麻薬をやる事で、有名アーティストと同じようになれる気分がしました。クスリに関してはその効き目だけではなく、犯罪性という事にも目を向けなくては、と思っています。その犯罪性が僕を虜にしている—その点にも目を向けなくてはイケないと思っています。(ジョー)

5月誕生日の仲間



左からサブちゃん、イチヤン、一休さん

【お願いします!】潮騒JTCでは使わなくなった中古パソコン、中古の車いす、中古自転車などの献品を求めています。回復活動や日々の生活に必要なので、どうかご協力を宜しくお願い致します。

新刊紹介コーナー



ダルク創設者で日本ダルク代表の近藤恒夫さんが、初めての子ども向け啓発書「ほんとうのドラッグ」を著しました。講談社刊。1200円(税別)。

受刑者のみなさんからの手紙～「潮騒通信」を読んで～

●薬物離脱教育の中で潮騒の施設名が出て驚く

4 月から薬物依存離脱指導プログラムが始まりました。これまでにオリエンテーション、精神科医の話、北海道ダルクの関係者による講話があり、ダルクはどうやって誕生したか、近藤恒夫さんのことが話されました。ダルクの考え方や入寮者の生活、ミーティングの意味など、私たちの多くの質問に対しては、北海道ダルクのメンバーが分かり易く答えてくれました。「潮騒 J T C から手紙が来た人はいますか？」と問われ、ピンポイントで潮騒の施設名が出てきたことには驚きました。それだけ幅広い活動をしているんだなあ、と改めて思いました。

(北海道 I・T)

●再び矯正施設には入所しないと心に強く誓う

栗原様からの手紙で「H さんは回復できる人だと私の目には映りました」と書かれてあり、その言葉が私自身をどれだけ心強くさせてくれた事かわかりません。とはいえ、これから薬と縁を切るのは大変な努力がいることかは、自分自身が一番わかっているつもりです。何とか栗原様に心の支えとなって頂き、再びこの様な矯正施設には入所しないと心に強く誓っております。日本ダルク代表の近藤恒夫氏の「薬物依存を越えて」の本を手にとりました。読み始めたばかりですが、今の私にはきっと血となり肉となると思っていますので、しっかり勉強していきます。

(北海道 H・S)

●ミーティングを通して不思議な力を知る

私は何 10 年もの間、決して止めることのできなかった薬物との関係をグループミーティングで話したところで、どうかなるものではないかと思っていました。想い出したくもない過去の古傷に触れ合い、惨めな生活をしていたことや、誰からも相手にされず、寂しく恥ずかしい生活を送ってきたことなど、とても他人には話すことのできない、と。

それに人前で話をするのが苦手な私なので、早く話を終わらせようと話を始めたのですが、少しずつ話をすると、不思議と 34 年前の 18 歳の時に初めて覚せい剤を使った、あの日の出来事が鮮明に蘇りました。何がきっかけで、どういう気持ちで覚せい剤を使い、その後も悪いと分かっているのになぜ、使い続けたのか。あの頃の自分の姿や、気持ちを素直に知ることができました。18 歳といえばまだ子供で、その子供の頃に危険な薬物に手を出し、覚せい剤ほしさに親兄弟からお金を騙し取って泣かせたり、友達からはお金を借りまくって知らんぷりをし

ては友達を傷つけていました。知らず知らずのうちに、根深い依存症という病気に蝕まれていったのだと思います。

そうした青春時代を思い出すと、大声で泣きたい程の気持ちになりました。ふと気が付くと、人前で話をするのがとても苦手だった私が、なぜか話をしたい気持ちになっていました。難しいと思われたミーティングでしたが、(中略) 4 回の覚せい剤離脱教育を受けていろいろな話したことで、今まで胸の内に秘めていた薬物に対する重苦しい気持ちが少し軽くなりました。同じ依存症を持つ人達の前で、初めてのミーティングで感じたことは、ほとんどの人が同じような体験をしているので格好を付けた話や見栄を張った話は無用で、素直な気持ちで話をすればいいんだということでした。

(東京都 K・H)

●出所 3 カ月を切り、体力づくりの日々

昨年、道内は 5 月の中旬頃にあちらこちらで開花が聞かれましたが、今年は寒さで開花が遅れています。ラジオでは桜をテーマにした曲が流れているのに、ふと窓の外を見ると桜ではなく雪が舞い、吹雪いています(笑)。そちらの方では求人、仕事はどうでしょうか？ 鹿島港、神栖の方は住友金属関係の仕事がありそうですが…。不況ですから選り好みしなければ、とは思うのですが、厳しいのが実情でしょう。潮騒が取り組むプログラムのジョブトレーニング・メニューに参加させてもらえるのがチャンスだと思って、肉体労働ができるように運動で体力づくりをしています。出所 3 カ月を切りましたので、さらに筋トレやランニングを増やしています。

(北海道 T・H)

●社会に戻ったら自分のことを子供たちに話す

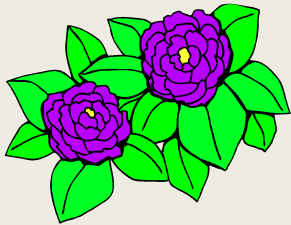
自分には小学生の子供がいるのですが、この子が中学生、社会人になった時に友達の誘惑などから、薬に手を出してしまうのではないかと危惧しています。誘惑に負けず、きちんと断る勇気を持てるだろうか、と。そうならないためにも、自分のことを我が子に話すつもりです。自分が卒業した中学校は、鹿嶋市で 1、2 番目に悪かった中学なので、自分の先輩や友達は皆、不良になってしまいました。そこから薬につながっていった訳ですが、社会に戻ったら薬の恐ろしさや自分のことをできるだけ多くの子供たちに話すつもりです。そして鹿嶋、神栖を覚せい剤のないまちにしたいと思います。

(北海道 A・M)



しおさい文芸

選者 桐本石見



新東名疾駆のボルシェ春霞

潮騒・豊

四月十四日に御殿場、三ヶ日間が開通した新設計のハイウェイ、そこを走るボルシェの句で山口百恵の歌を思う。あつと言う間に春霞に消え去るスピード。爽快な句です。

武士の魂は緑陰名古屋城

潮騒・豊

「武士」は、もののふ、とも言いますがこの句は少し解りづらい、何か忠魂碑のことかも、「前書」の欲しい句でもあります。名古屋城は徳川御三家尾張藩の城で天下普請により築城、戦後消失部を復旧して、金の鯨鯢が有名。城での戦はないが緑陰にその武士の魂を想う句かも。「秋空に金の鯢鯢名古屋城」が私にあり懐かしい。



しおさい短歌



夜具のほかに家具ひとつ無き牢に座し

慈しむごと囚衣をたたむ

(北海道・章三郎)

灯が消えし私の慰み朧月

北海道・健

病院などでも決められた時間が来ると消燈する、相部屋では話も続くが個室だと寂しい。窓の朧月が心を包む様に慰める、冬の月でなくてよかった。「灯が消えし私の慰みの朧月」にすると調べも良くなります。

手にとれぬもの美しく春の月 北海道・健

「手にとれぬもの」は物質と希望がありますが、それ等を含めて叶わぬ事への憧れかも、誰しも望が全て叶う訳ではありませんが、何時でも何処でも希望を持つことは生きる支えになります。ほんわりとした春の月に叶う句です。

しおさい文芸

選者 桐本石見



葉桜の古里に友減りゆける

潮騒・豊

桜は日本を代表する花で花便りの言葉もあります
が、その桜の里も葉桜になり静かになると淋しい思
いにもなる。また幼馴染や友人も老いたり故郷を離
れて少なくなると余計に寂しさも増す、しみじみと
した一句です。



他人^{ひと}が皆自由気ままに見ゆる日の

我を縛れる獄という枷

帰る日を夢に描けば今日の日も

思い煩うことなく過ぎる

(北海道・章三郎)

春の日の獄舎に耳を澄ましけり

北海道・章三郎

「春の日」は一般的には暖かい思いがあり、獄舎でも話し声など明
るさを想います、その中で一人耳を澄ます、寂しい思いのする一句
です。秋だと遠くの声ももっと聞こえます。

冷えた手で熱く想いを書く手紙

北海道・章三郎

手紙にも種々ありますがこの場合は妻や家族への手紙を彷彿しま
す。「冷えた手に想いを熱く」に切実な心情の伝わる句です。「冷え
し手に熱き思いの手紙書く」で口唱も思いも深くなります。

早ばやと終わる春場所また老ゆる

北海道・章三郎

春場所は大阪場所とも言いますが、六場所所制の中では年内にまだ四
場所ありますし、一日の日もこれから夏の明るさに向かうので「早々
と終わる秋場所また老ゆる」では如何でしょう。好きな相撲やイベ
ントが終わると確かにまた歳を重ねる思いにはなります。面白い句
です。

機の尖は春の霞を割きゆきぬ

潮騒・豊

機は飛行機で、霞の中を飛ぶ様の句ですが霞は空全体で薄いので、
梅雨

の黒雲か霧のぼうが割く感じがします。「機の尖は梅雨の黒雲割きゆ
けり」

降る雪に白樺林白き家

潮騒・豊

冬の長野県は何度も訪ねたことがあります、雪の山も裾の白樺林
も白一色で美しい、その林の中の家もまた白で何かメルヘンを誘う
句です、しかし豪雪となれば住む人には苦勞の多い雪でもあります。

Information

5月中旬～6月中旬行事予定

- 19日 北関東薬物関連問題研究会、秋元病院メッセージ
- 20日 アルコール茨城地区セミナー (日立市)
- 21日 新宿・とまりぎ相談業務
- 23日 埼玉県吉川市福祉・民生委員視察来所
- 24日 秋元病院ソフトボール交流試合
- 26日 葉家連フォーラム (宇都宮市)
- 27日 NPO法人潮騒JTC定時総会、潮騒家族会
- 6月1日 韓国ダルク開所式フォーラム
- 8日 水戸更生保護女性会視察来所
- 10日 秋元病院メッセージ
- 15日 川崎ダルクフォーラム

献金・献品を頂いた方々 (4月中旬～5月中旬)

- | ▼献金を戴いた方 | ▼献品を戴いた方 |
|----------|---------------|
| 富井建夫 様 | 星 浩子 様 |
| 上田 隆 様 | (セシアン) 藤村ますみ様 |
| 佐藤 浩 様 | 池田幸子 様 |
| 小岩井商事様 | 平田幸子 様 |
| 大友和子 様 | 岩田けい子様 |
| 坂西ミヤ 様 | 小岩井商事様 |
| 高田武義 様 | 山九(株)明日鹿寮様 |
| | 根崎 彰様 |
| 石井照明 様 | 吉岡富美子様 |
| 長澤勇吉 様 | 栗原 稔 様 |
| | 猪瀬英明 様 |
| | 中村照代 様 |

☆そのほか匿名の皆様から献品・献金をいただきました。
ありがとうございました。

※発送作業簡略化のため、振込取扱票は
全員の方に同封させて頂いております。
どうぞご理解の程をお願いします。

編集・発行

特定非営利活動法人

潮騒ジョブトレーニングセンター (本部)

T314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱 34 号

T314-0006 茨城県鹿嶋市宮津台 210-10

TEL/0299-77-9099 FAX/0299-77-9091

潮騒リカバリーホーム (中施設)

T314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱 56 号

T311-2213 茨城県鹿嶋市中 2773-16

TEL/0299-69-9099 FAX/0299-69-9098

潮騒スリークオーターハウス鉾田

T311-2113 茨城県鉾田市上播木 1113-39

TEL/0291-39-4872

E-MAIL k.s-darc@orange.plala.or.jp

ホームページ <http://shiosaidarc.com/>

編集後記

「生活の恒常性」という言葉がある。明日も今日と同じように生活が繰り返されるという意味。人間とは勝手なもので、平穏無事を願いながらも、それが毎日続くとなると退屈に思えたりして、今度は変化を求めるようになる。でも、行き過ぎた変化や振幅の激しい日常となると、今度は前のように変わり映えしない日常を追い求めたくなるから不思議だ。でも、よくよく目を凝らせば、私たちの日常とは小さな変化の積み重ねでもある。本当は何一つとして同じ日常はない。だから今という時間を大事に、精一杯生きることが何事かであるはずだ。それにしても日常があまりに早く過ぎゆく。これも老いの兆候なのだろうか。日々、反省の日々を送る入寮者に見習い、無理しないで「今日一日」の精神で生きようと思う。(市)

発行所 郵便番号一五七—〇〇七三
東京都世田谷区砧六—二六—二一
特定非営利活動法人 障害者団体定期刊行物協会
(会費を含む) 定価一〇〇円

今月も多くの方から献金・献品をいただきました。心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。おかげさまで潮騒JTCは、回復のためのプログラムを実践することができておりますことをご報告いたします。今後ともご支援くださいますよう、なにとぞ宜しくお願い申し上げます。